
とある少年と絶望

RD666

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少年と絶望

【Nコード】

N3670M

【作者名】

RD666

【あらすじ】

いつもの日常から異常の世界へとばされた少年の
一話だけのたったそれだけのお話。

(前書き)

なんか適当に思いついただけの駄文。
まあ、きつとこんなかんじの事書いた人、
いるんだろっうなあ、、、

桜が舞い散る道の中、一人の少年が歩いていた。

トボトボと歩いていた『彼』は、ブツブツととにかく呪文のように独り言を言っている。

「くそ・・・不幸だ・・・何だってこんなことになっちゃったんだ？これ、俺の人生で一位を争うな、絶対」

なぜこんなことを呟いているか、と言うと。

『彼』はなぜ自分がここにいるか知らない。

正確に言うと、どうやって来たかは分かっているのだが、ここがどこなのかと、帰る方法がないのだ。

今日の朝（本当に『今日』なのかも分からないが・・・）いつも道理に秋の学校ほしゅうに行く準備をして、同居人と自分の朝飯を作り、のんきにテレビ観ながらのんびり束の間の休息をとっていたのに。

突然何もなかった所に青白いトンネルが生まれ、同居人が飲み込まれそうになって、パニック半分の無我夢中で

左手で同居人を引きよせ、全体重をかけた『右手』でトンネルを対^{なぐ}処^{りとは}した。

..... 普段ならそれで終わるはずだった。

どうも、『核』が別にあつたらしく。『彼』の手はスカツという音と共にその空間にのまれ、全体重を前にしていたので引き返すこともできず、前のめりになったまま、その空間に落ちてしまったのだ。

で、落ちた先がこの桜満開の季節感オール無視のステキ道路、だったというわけだ。

「どうしよう・・・やっぱなんかの魔術・・・なのか？でも、一体誰がこんなことを？」

てか、これはどーゆー状況なんですかあゝ！？」

誰もいないけど、とりあえず『彼』は叫んで見る。

まあ、何も状況は変わらないが。

「まあ、立ち止まってても意味無いな・・・何か見た感じ『外』みたいだし。とりあえず誰かにここがどこか聞かねえとな」

こんなことを何回もやっている『彼』は行動力が高いのだ。

『彼』はツンツンの頭をボリボリ掻きながら道を歩く

「あ！あれって・・・間違いない！人だ！30分も歩いて実は無人島に来たんじゃないかとか思っていたけど、ちゃんというじゃねえか！」

30分も永遠に続くような死の桜道を歩いていた『彼』の場所から、200メートルくらい先に、二人の人影が見えた。

そんなことが本当に起きそうな自分の人生に嫌気が若干ですが、まあ、今はとりあえずここがどこなのか確認するのが先だった。

「はあ・・・ハア・・・す、すいません・・・えっと・・・道に迷ったんですけど、ここかどの辺か教えてくれませんか？」

やっと孤独の恐怖から出られた『彼』は息も絶え絶えに質問をする。

そこには『彼』と同じくらいの年齢で、セーラー服を着て前髪を髪留めでとめた少女と、

桜の木で首を吊っている青年だった。

「んな・・・!!」

『彼』はうまく言葉が出なかった。

まさか見知らぬ地であえた最初の人間が首吊り自殺者と女子高生だ。平常心でいられる方がおかしい。

そんな感じで『彼』が固まっている内に少女が解凍されたようで、

「い・・・いけません・・・」

そんなことを呟き

「死んではいけませんっん!!!」

そういつて

首吊り自殺者に抱きついた。

本人は助けようと必死なのだろうが、もちろんそんな事をすれば、さらに首が閉まるわけであって。

青年はパニックになって全力で苦しみから逃れようとしてるし。

やっと思考回路が動き始めた『彼』はとりあえず、この少女に『人殺し』のレッテルがつかないように。

「って待て待て!! そんなことしたら逆にその人、三途の川へ3倍

速でついちゃうから!!」

『お前がやっているのは単なる殺人』とはっきり言えない優しい『彼』はとりあえず少女を止めてみる。

「え?」

やっとな『彼』の存在に気付いた少女は地面へ思いっきり体重をかけたまま返答する。

するとロープが人二人分の重さに耐えきれなくなり、プチン、と音を立てて切れた。

『彼』はとりあえず脈があるか確認しようとした時、青年は突然動き出して咳き込み始めた。

そして

「ゴホ!・・・ゴホッ!!・・・死んだらどうする!!?」
少女に向けて言い放つ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい?」
自分で首を吊っていた人間が何言ってるんだ?と『彼』は思う。
まさか他から強制されたわけではないだろう。
もしそうだったら自殺以上に真剣なもんだいだし。

そうすると少女がふと

「先生、また身長伸ばそうとしていたんですか?」
といった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『彼』はこの少女が何言ってるのか分からなかった。

『彼』の周りには不可思議な思考回路の持ち主はたくさんいるが、

そのどれをあたっても流石にこんな意見は出ないだろう。

するとさっきまで黙っていた青年が

「だから風浦さん。これは身長を伸ばすためじゃないと何度も言っているでしょう。何で分からないんですか？」

と、不思議少女にツツコミを入れる。

「あの……あなた達は毎回毎回このような事をやってなさるんでせう？」

『彼』のいた世界では信じられないが、文化というものがあるし。とか思いながら質問すると。

「そうなんですよ。先生、何かあるとすぐにこれをやるんです」

「そうなの！？これは日常なのかよ！？つか、この人が先生？この自殺未遂成人男性が？」

「そうですよ、私の担任教師です」

こんなのが担任教師って……と『彼』は思う。まあ自分も人の事言えないような担任教師だが。

すると青年が

「そういえば、あなた、見かけない顔ですね。とりあえず私、生徒の顔と名前は一通り覚えているのですが、あなた、名前は？」

そう言ったので『彼』は答える。

「俺のなまえ？（言ったって絶対わかんねえだろうけど……）」

「上条当麻」

「上条くん……やっぱり覚えがありませんね……ちなみに私は糸色望といいます」

そう、

全ての事柄をネガティブにしか取れない教師と

どんなに不幸な事柄にあたっても決して諦めない少年、

絶対に会える事無い似たもの同士の二人が出会ってしまった瞬間だった。

（後書き）

まあ、友達からのリクエストでノリで書いたけど・・・多分

連載は無理なんじゃねえか？

と思いましたので、とりあえず短編です。

感想をいただけるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3670m/>

とある少年と絶望

2010年10月9日19時36分発行